



第17回群馬県地域リハビリテーション協議会報告

群馬県地域リハビリテーション協議会・委員長 山口晴保

H28年3月17日に県庁294会議室で第17回群馬県地域リハビリテーション協議会が開催された。吉田誠介護高齢課長から地域リハへの期待について挨拶をいただいた後に、山口晴保委員長と、長坂資夫副委員長が再任され、議事に入った。

まず県支援センターと各広域支援センターの実績概要が報告され、それぞれの支援センターが特色のある取り組みを行っていた。

本年度末で支援センターの指定期間が終了になるため、来年度から2年間の指定について討議し、現行の指定を継続することとなった。

介護予防サポーターの育成については、本年度も順調に実施され、平成27年度だけで初級452名、中級404名、上級371名が誕生した。平成18年度からの10年間では、初級8,776名、中級6,312名、上級2,960名となり、全35市町村で介護予防サポーターを活用している。既に育成した介護予防サポーターのフォローアップ研修を担当している広域支援センターもあった。平成27年度は19市町村が養成研修を実施し、平成28年度には25市町村が実施を予定している。これらに各広域支援センターが深く関わっている。(サポーター数平成28年3月31日予定)

意見交換では、県から地域包括ケアシステム構築に向けた流れの中での介護予防や医療介護連携などが説明され、活発な議論が行われた。PT・OT・ST三士会が進めている地域ケア会議で活躍できる人材育成への期待が大きかった。地域ケア会議の明確化と、広域支援センターと地域包括支援センターとの連携が今後の課題である。

来年度の地域リハ関連の予算は、本年と同額になった。予算を有効活用して、市町村や地域包括支援センターと連携して介護予防サポーターの育成やフォローアップ研修などに引き続き広域支援センターが関わり、地域包括ケアの実現に貢献することが望まれる。

表 これまでの介護予防サポーター養成数 平成28年3月31日現在

	初級	中級	上級 (実施市町村)
平成18年度	2, 093名	1, 172名	66名 (4市町村)
平成19年度	1, 184名	942名	285名 (8市町村)
平成20年度	1, 083名	762名	540名 (18市町村)
平成21年度	876名	650名	377名 (17市町村)
平成22年度	672名	499名	283名 (16市町村)
平成23年度	522名	388名	171名 (11市町村)
平成24年度	728名	605名	272名 (17市町村)
平成25年度	511名	326名	325名 (16市町村)
平成26年度	645名	564名	270名 (13市町村)
平成27年度	452名	404名	371名 (18市町村)
累計	8, 766名	6, 312名	2, 960名

群馬県地域リハビリテーション広域支援センター連絡協議会

群馬県地域リハビリテーション支援センター長 山崎恒夫

平成 27 年度群馬県地域リハビリテーション広域支援センター連絡協議会が平成 28 年 3 月 17 日(木)、群馬県庁 29 階の 294 会議室で開催されました。

会は第 17 回群馬県地域リハビリテーション協議会に引き続き行われ、最初に本年度の県地域リハ支援センターの主な活動報告と総括が行われました。研修会の開催事業として、平成 28 年 1 月 23 日に“第 14 回群馬地域リハ研究会”を、平成 27 年 12 月 25 日には“平成 27 年度群馬大学地域貢献シンポジウム「住民と行政とともに創る健康なまちづくり」 ～保健サポーターのチカラを地域に！～”を群馬大学、群馬県と共催し、多くの方々の参加がいただけたことを報告いたしました。

続いて、自由な意見交換を行いました。この場では、特に地域ケア会議におけるリハ職の役割について、大変活発な意見交換をすることができました。皆様の今後の地域リハ活動にかける意気込みを強く感じ取ることができる有意義な会議であったと思います。

「在宅医療と介護の連携への取組」

群馬県地域包括ケア推進室

本県における平成 26 年の高齢化率は 26.8%となり、高齢者人口のさらなる増加が確実に見込まれていますが、自分自身や自分の家族が治療や療養を必要とする場合、条件が整えば自宅での療養を望む県民は 60%を超えています。

このため、県民が、可能な限り住み慣れた地域で安心して暮らし続けることができるよう、医療、介護、介護予防、住まい、生活支援等が包括的に確保される体制（地域包括ケアシステム）の構築が求められています。

県では、これまで在宅医療や介護予防、認知症施策の推進など様々な施策を通じ、高齢者を支える地域づくりに取り組んできましたが、医療と介護の連携を強化し市町村が実施する地域包括ケアの推進を支援するため、平成 27 年 4 月に地域包括ケア推進室を設置しました。

当室では、全市町村が平成 30 年度までに取り組むこととされた在宅医療と介護の連携を推進するため、県内各地域の実情に応じ、在宅医療提供体制の充実を図り、在宅医療・介護に携わる人材育成や、地域包括ケアへの県民の理解向上のための啓発事業等を実施しています。

また、要介護状態の患者の居宅への退院準備の際に、病院からケアマネジャーに必要な引継ぎができるよう「退院調整ルール」策定を、平成 27 年度は渋川地区において国のモデル事業として実施し、平成 28 年度は県内 4 圏域に拡大して実施します。

在宅医療・介護連携の推進には、行政、医療関係者、介護事業者はもとより、地域住民等の協力関係が必要不可欠です。今後も地域包括ケアの構築に向けて、地域住民の参加を得ながら高齢者が自分の意思で自分らしく暮らすことができる地域づくりを目指していきますので皆様の御協力をお願いします。



ぐんま認知症アカデミー

第 11 回春の研修会

平成 28 年 7 月 3 日(日)13:30～18:00

参加費:500 円

●(株)あおいけあ 加藤忠相先生「新スタイルの認知症ケアで離職ゼロ」 ●東京都老人総合研究所 島田千穂先生「看取りケア」 ●その他
※会場は、群馬会館を予定しておりますが、改修工事状況で、使用できない場合は、会場変更いたしますので、ホームページにて、6 月中旬までにご案内いたします。

詳細とお申込は、HP をご覧下さいませ。

<http://happytown.orahoo.com/ninchi/>

第 14 回群馬地域リハ研究会

講演Ⅰ「地域生活を支援する生活行為向上マネジメント」報告

介護老人保健施設 山王ライフ 理学療法士 近藤昭彦

今日、地域包括ケアにおいて、リハビリテーション専門職には自立支援や生活行為向上に資するリハビリテーションプログラムの提供が求められています。しかし、現場では、まだまだ自立支援に向けたリハビリテーションや介護サービスの利用が進んでいないのが現状ではないでしょうか。私自身、日々の業務を振り返ると、活動や参加レベルの明確な目標を利用者様や他の支援者と共有する方法について悩むことが多いように感じます。そんな中、今回の小林先生の講演で、生活行為向上マネジメントを用いると、利用者様の主体的な生活行為のニーズ把握から目標達成までのプロセスを、利用者様やその家族、さらにはその人に関わる全ての支援者と共有することができると知りました。

生活行為向上マネジメントは①ニーズの聞き取り②評価およびアセスメント③生活行為向上プランの立案④プログラムの実施⑤再評価・見直し⑥終了・申し送りの6つのプロセスから成り立っています。各プロセスには決められた用紙があり、その書式に従って記入していくことで完成させられるので、リハビリテーション専門職だけでなく、関わる人全てがわかりやすいというメリットがあります。また、生活行為向上マネジメントでは、目標達成のために本人が取り組むこと、家族が取り組むこと、各支援者が取り組むことそれぞれを明確化していくため、目標達成までのプロセスを「見える化」できるというメリットもあります。ただ、その反面、記録や面接に時間が掛かることがあり、使用するには一部工夫が必要かもしれないとのことでした。

今回の講演を通して、生活行為向上マネジメントは、そのメリットを最大限に活かすことによって、より質の高いチームケアにつながると感じました。まだまだ、私自身理解できていないことが多く未熟ですが、少しずつ知識を深め、関わる利用者様の生活が少しでも良い方向に進むよう今後も努力していきたいと思えます。

講演Ⅱ「地域におけるリハビリテーション栄養」報告

榛名荘病院 OT 土岐新太

最近サルコペニアという言葉をよく耳にする様になってきました。テレビの番組等でも紹介される機会があったり、介護予防の研修でも取り上げられる事が増えた様な印象を持ちます。今回「地域におけるリハビリテーション栄養」というテーマで御子神由紀子先生より講演を頂き、改めてサルコペニア(加齢に伴う筋肉量の減少)とリハビリテーションにおいて栄養面を考える事の重要性を感じました。講演の中でもリハビリテーションと栄養とはベストパートナーである事が強調されていました。私自身、病院に勤務する OT として、廃用症候群の様な患者様にはまず、運動や活動量の増加というイメージがありました。しかし、低栄養でサルコペニアの状態の様な患者様に積極的なリハは逆効果の可能性も起こりえます。まず、その患者様の栄養面の評価を行う事の重要性を感じました。サルコペニアの診断基準は、筋肉量低下、筋力低下、身体機能低下が挙げられますが、日常的診断としてはBMIが18.5未満、下腿周計が30cm以下であることが目安になるとの事でした。また栄養管理のスクリーニングとして行い易いMNA-SF等の紹介もして頂きました。その他血液検査の結果等、まず、対象者の方の栄養状態を確認する事、またDrや栄養士等、他職種との情報交換を密に実施する事も重要になると思えます。リハと栄養管理を同時に行う事が、ADLやQOLの向上に大切だと感じました。

群馬リハネット事務局便り

(H27.11~H28.3)

平成28年3月現在会員等の状況

* 加入団体 33 団体

* 賛助会員 団体会員 2 団体

(株)孫の手・ぐんま(旧ハッピーラブハッピー)と、榛名荘病院より賛助会費をいただいております。

* 個人会員 1名

11.25 ニュースレター17号発送

12.6 ぐんま認知症アカデミー

10周年記念医療介護連携大会(後援)

12.25 群馬大学地域貢献シンポジウム(後援)

1.23 平成27年度第1回情報交換会

県支援センター事務局便り

(H27.11~H28.3)

11.25 ニュースレター25号発送

12.24 県介護高齢課より事業予算受入

12.25 平成27年度群馬大学地域貢献

シンポジウム(群馬大学と共催)

1.23 第14回群馬地域リハ研究会

3.17 第17回群馬県地域リハビリテーション

協議会・広域支援センター連絡協議会

3.31 ニュースレター26号発行

「2015介護予防サポーター育成・活用事例」発刊

編集デスク 山口晴保

群馬県で介護予防サポーターを育成・活用している市町村から原稿を頂戴し、2年に一度、育成・活用事例を作成しています。過去の「介護予防サポーター育成・活用事例」は群馬県地域リハビリテーション支援センターのホームページ(<http://www.grsc.biz/>)、「特集」欄から該当のPDFファイルを閲覧・ダウンロードできます。本原稿は2015版の原稿を頂戴した6市町村から抜粋して、最新内容をお届けします。

- 1) 前橋市:** 上級登録者が890名に上り、600名以上が実際に活動している。平成27年度からは「ピンシヤン体操クラブ」を新たに広めている。これまでふれあいきいきサロンなど227会場で体操を取り入れた活動を行ってきたが、開催頻度の低さが課題だった。そこで、サポーターの新たな活動の場として「ピンシヤン体操クラブ」の制度を開始し、H27年12月末までに35グループが登録している。月に2回以上の開催が要件で、週1回以上のグループには初期費用や会場費補助などの支援を行っている。これに加えて、「認知症を語るカフェ」を平成26年度より開催している。この運営には介護予防サポーターがスタッフとして協力している。
- 2) 藤岡市:** 192名が上級サポーターに認定されている。活動者の8割は、筋トレの指導者として活躍している。1つの会場を2~3名で受け持ち、現在実施している85会場のうち8割以上の会場で活動している。定期的実施している合同筋トレや体力測定会などにも協力しており、筋トレの普及に大きな役割があるのも特徴である。また、社会福祉協議会に委託して68会場で月1回実施しているミニデイサービスで、スタッフの補助としてサポーターが活躍している。1時間の筋トレのほかに、フォローアップ研修で学習した脳活運動や口腔機能向上運動などを、サポーターが自主的に地元の教室で取り入れたり、ロコモチェックを行うなどで参加継続を促している。
- 3) 桐生市:** 211名の上級サポーターが育成されたが、登録は120名で、実際の活動は38名である。年1回の健康祭りへの参加、各地区での「元気おりおり体操」の主催や補助、「にっこり楽々教室」や「元気いきいき教室」の補助で活躍している。
- 4) 館林市:** これまでに上級51名を育成した。サポーターのフォローアップ研修を毎月1回開催している。サポーターの地域における活動の中心は、市内で活動している自主グループ「生きいきサークル」等の運営補助(体操のモデルや職員の補助等)である。生きいきサークル数が13団体にまで増えており、その支援者として、介護予防サポーターの役割は大きく、受付や体操の指導などに加えて、教室の明るいムードメーカーの役割も担っている。
- 5) 渋川市:** 中級78名・上級43名の計121名が活動している。①市が実施する介護予防事業「シニア筋力ぐんぐん教室」への協力、②認知機能低下予防教室「ハピネスクラブ」への協力、③介護予防講演会、介護予防フォーラムへの協力、④サポーターによる介護予防教室や勉強会等の自主開催活動、⑤市民ふれあい健康まつりへの参加など。全体研修、会議(年4~5回)、代表者会議、拡大代表者会議(年6~7回)、先進地視察(26年度は新潟県三条市、27年度は前橋市)と運営体制づくりとフォローアップ研修に力を入れている。
- 6) 南牧村:** 上級サポーターが18名で、元気に介護予防教室【二次予防教室/複合型介護予防教室】へのボランティア協力(受付・運営の補助・お茶入れ・待ち時間に運動やレクリエーションを行う)している。また、家族介護支援事業の運営の補助(年3回)や地区で行っているサロンのお手伝い、サポーターによる自主的な活動を行っている。自主活動は、①サロン(お達者クラブ)の運営主体、②独り暮らしや高齢世帯への訪問や散歩の同行、③お達者クラブ合同筋トレを開催(年1回)、④お達者クラブウォーキングを開催(年1回)など。

編集デスク

山口晴保

山上徹也

角田祐子

発行

群馬リハネット

群馬県地域リハビリテーション支援センター

連絡先

群馬リハネット事務局

群馬県地域リハビリテーション支援センター事務局

群馬大学大学院保健学研究科内

Tel/Fax : 027-220-8966

E-mail: tsunoday@gunma-u.ac.jp